

巻頭言

今年度は国際学会に2件参加しました。6月には、韓国の済州島で COIL-6 が開催されました。高額な宿泊費と MERS の流行を勘案し、教員のみ参加しました。距離が近いこともあり、日本からの参加も多く、大盛況で充実した学会でした。イオン液体の産業利用セッションも興味を引きました。12月には、ハワイで Pacifichem2015 が開催され、院生全員で参加しました。学生のポスター発表は、英語発表の準備も含め、良い経験となったはずです。ポスター会場での交流・情報収集等も有意義でした。5年に一度の行事なので、参加できた学生さんは幸運です。イオン液体のセッションが連日組まれており、内外の研究者の活発な研究状況が伺えました。私自身の研究室としても、この分野の研究の一端を担っていく責任を感じました。こうした感覚は、ぜひメンバー全員と共有したいところです。

私自身は、学会以外でも数件、まとまった発表をしました。印象に残ったのは、日本学術振興会の委員会での発表です。光機能物質に関して非常にレベルの高い講演が続き、刺激的な会でした。学内の有機合同研究会、元素分析の会でも講演しました。このほか、科研費の研究会等もあり、若干負担となりましたが有意義でした。関連しますが、今年は各種の予算申請書の作成に例年に増して時間を割かれました。

ところで本学では、教育改革で二学期クォーター制が導入されます。こうした改革が行われる背景とも関係しますが、今の学生世代が、ひと世代前の学生に比して若干気の毒にも思える点があります。それは、大学まではほぼ障害なく精神的にも比較的楽に通過できるのに対し、卒業した途端に厳しい職業人生が待ち受けている点です。つまり、もちろん就職活動という関門はありますが、就職前後で精神的に大きなギャップがあります。研究室生活がこの間の良い橋渡しになることは、学生の将来に大きく資することです。この点を学生が自覚できるとよいだろうと思います。研究室において、能動的に動き、積極的に仕事を進める心がけを学ぶことが有用です。ところで現在は、しばしば「自己責任」が主張され、学生もこの点を自分に都合よく考えがちです。そのため、たとえ学生の将来を案じてであっても、教員が厳しく言うのは躊躇されます。要は、教員の指導にもこうした限度があるため、なおさら学生自身の自覚に応じて、将来に差がつきます。

今年度から新たに、院生の卒業制作として、研究紹介 VTR を制作してもらうことにしました。研究室の Web にも掲載します。研究内容を伝えるのに動画が効果的なうえ、これらの制作経験自体が院生のスキルアップとなります。

今年も、卒業生全員に幸あれと祈ります。

(2016 年 3 月 持田)